

# 下二段活用補助動詞「給ふ」について

二十七回生 高原昭子

## 目次

### 序論

### 本論

#### 第一章 上接語について

##### 第一節 上接語の種類と頻度

##### 第二節 上接語の主体者について

##### 第三節 「見る」の意味について

##### 第四節 特異な上接語(略)

#### 第二章 活用形について

##### 第一節 活用形の種類と頻度

##### 第二節 複合形態について

##### 第三節 終止法の用法について(略)

##### 第四節 特異な用法について(略)

#### 第三章 敬意の程度について

##### 第一節 場面の考察

##### 第二節 敬意の主体と対象

### 結論

## 序論

下二段活用補助動詞「給う」は、周知の如く謙譲の補助動詞である。その発生は上代であるが、盛んに用いられるのは、中古、特にその中期で、中古末には既に衰え始めるのである。そこで、本稿では、このように中古の一時期のみに栄えた下二段活用補助動詞「給ふ」が、中古において、どのような性質をもち、どういふ使われ方をしているのか、第一章 三節を中心に検討してみる。

尚、資料としては、下二段活用補助動詞「給ふ」が話言葉として一般的に用いられたと考えられる次の四作品を使用した。

「落窪物語」 日本古典全集 10

「源氏物語」 日本古典全集 12、17

「夜の寝覚」 日本古典全集 19

「狭衣物語」 日本古典文学体系 79

## 第一章 上接語について

### 第一節 上接語の種類と頻度

下二段活用補助動詞「給ふ」の上接語は、他の補助動詞と違って、数種類の動詞に限られている。それは表Ⅰに示されているように「思ふ」「見る」「聞く」「知る」の四語である。しかし、この四語は決して同じような頻度で

▽ 表 Ⅰ

	狭衣物語	夜の寢覚	源氏物語	落窪物語	作品名 上接語
6 0 2 (82.8%)	7 9 (80.6%)	5 3 (79.1%)	4 3 4 (83.0%)	3 6 (92.3%)	思 ふ
1 0 8 (14.9%)	1 1 (11.2%)	1 4 (20.9%)	8 1 (15.5%)	2 (5.1%)	見 る
8 (1.1%)			7 (1.3%)	1 (2.6%)	聞 く
1 (0.1%)			1 (0.2%)		知 る
8 (1.1%)	8 (8.2%)				その他
7 2 7	9 8	6 7	5 2 3	3 9	計

用いられた訳ではなく、「思ふ」が圧倒的に多く、全用例の八二・八%を占めている。次いで「見る」が多く、「聞く」が少数あり、極めて稀に「知る」がある。「知る」の用例は『源氏物語』における次の一例のみである。  
▽ 仲人「くはしくも知りたまへず。：：」（源氏・東屋 P 17）

ところで、「思う」「見る」の用例をあわせると、全用例七二七例中、七一〇例（九七・七%）を占めている。又、作品別に見ても『夜の寢覚』は一〇〇%、即ち「思ふ」「見る」以外の上接語はなく、『源氏物語』でも九八・五%を「思ふ」「見る」で占め、『落窪物語』『狭衣物語』もそれぞれ九七・四%、九一・八%となっている。このようなことから考えると、「給ふ」の上接語は「思ふ」「見る」であるといつても過言ではない。つまり、「給ふ」の上接語は「思ふ」「見る」がほとんどで、稀に「聞く」「知る」があるということである。

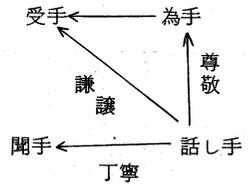
### 第二節 上接語の主体者について

「給ふ」は前述したように、謙譲の補助動詞である。謙譲語であるから本来は、話し手が、相手に敬意を払うために為手の動作に謙譲語を使い、相対的に受手を高めることになつてゐる。即ち、受手敬意である。

ところが、「給ふ」の場合は表Ⅱに示された通り、他の人物でなく自分自身、即ち話し手自身の動作につく例がほとんどである。『夜の寢覚』では全用例が、又、全用例七二四例中、七一一例（九八・二%）が自分自身の動作に

▽ 表 II

	狭衣物語	夜の寝覚	源氏物語	落窪物語	
7 1 1 (98.2%)	9 2 (94.9%)	6 7 (100%)	5 1 4 (98.7%)	3 8 (97.4%)	「たまふ」を自分自身 の動作につけた例
1 3 (1.8%)	5 (5.1%)		7 (1.3%)	1 (2.6%)	「たまふ」を自分以外 の者に動作につけた例
7 2 4	9 7	6 7	5 2 1	3 9	計



つけて用いられている。これは、「給ふ」が話し手自身の動作を低めることによって聞き手に敬意を払う丁寧語のような使い方、即ち聞手敬意であることを示している。これも「給ふ」の特異な用法と考えてよいだろう。さて、表Ⅱをみると、自分以外の者に付いた例が十三例あるが、

それは、たとえば、

▽僧都「：それにつけてもの思いものほしになむ、齡の末に思ひたまへ嘆きはべるめる」と聞こえたまふ

(源氏若紫 P 288) のような例である。

これは僧都が妹の尼君の立場に身をおいて、尼君の気持を代弁しているところである。つまり、僧都は自分の肉親の尼君の動作に「給ふ」を付けて、聞手の源氏に敬意を払っているのである。この他、自分以外の者には、自分の家来、自分の親しい女、自分より身分の低い者の例がある。つまり、自分以外の者はすべて、話し手の側に属する人間であり、一人称と考えて差しつかえない。この結果、「給ふ」はほとんどが自分自身の動作に付けられ、稀に自分の側の人間に付けて用いられたということができる。

### 第三節 「見る」の意味について

これまで第一節・第二節で述べてきたことから、「給ふ」は、自分自身、又は自分の側の人間の「思ふ」「見る」「聞く」「知る」という動作を卑下することによって、聞き手に敬意を払う謙讓語であったと考えられる。ところで、伊藤和子氏は、この「給ふ」について、次のように述べておられる。

下二段の「給ふ」は、「思ふ」を中心とする自己の心情を表現する特殊な動詞のみに接続する言葉であった、と考えられないか、

これまでの結果から考えると、この説には少々疑問が残

る。確かに、「給ふ」の上接語は大部分が「思う」で、次いで「見る」「聞く」「知る」という主観的な動詞であつた。しかし、だからといって、その上接語が自己の心情を表現する特殊な動詞といえるのだろうか。伊藤氏はその根拠として

『源氏物語』においては「見る」の場合、その殆んどが、「思ふ」に通じる「見る」の用法である。「……ヲミル」といふ「見る」の使い方ではなく、「かやうな事実を……ニミル」という、視覚に訴へない、心でみる「見る」の使い方である。

と述べておられる。けれども、私は、「思ふ」に比べて「見る」の場合は、一般的に、客語をとり「……ヲミル」の使い方が多いように思う。又、「見る」が動作を表わすことも十分考えられる。そこで、氏の説について考察してみることにする。

第一節で述べたように『源氏物語』において、上接語「見る」は八一例あつた。その中で、氏の述べておられる「……ニミル」という例は、次のようなものである。

▽御方々の里人はべりつる中に、四位少将・右中弁など急ぎ出でて、送りしはべりつるや弘徽殿の御あかれならん  
と見たまへつる。(花宴 P 430)

▽齢のほどよりは、世をまつりごたむにも、をさをさ憚りあるまじうな見たまふる。(賢木 P 88)

▽あらぬさまにほれほれしうなりて、ながめ過したまふめれば、世のうきつまに、といふやうになむ見たまふる」と

聞こえたまへば(横笛 P 342)

右の例のように、「……ニミル」というのは、判断・感想の内容を受けて「……だと思ふ」「……のようにみる」ということだと思われる。このような視覚に訴えないで心でみるという例は、八一例中、二四例である。二四例を文法上から考えても、係助詞「なむ」「こそ」を受けた係り結びの例が十一例、「うれしう」とか「いとほしう」という形容詞を伴つた例が五例、判断した事を述べて、引用の「と」に接続した例が八例、とすべて判断・感想の内容を受けた「……のようニミル」の使い方となつてゐる。但し、八一例中、二四例あるだけなので、殆んど、という表現は適當でない。

では、視覚的な「……ヲミル」という使い方はどうかと  
いうと、十八例はあるようだ。

(1) いぎたなき人は見たまへむにつけても、なかなかうき世のがれ難う思うたまへられぬべければ……(須磨 P 161)

(2) 先つころ、まかり下りてはべりしついでに、ありさま見たまへによりて……(若紫 P 277)

(3) 仮名文見たまふるは目の暇いりて、念仏も懈怠するやうに益なうてなん、御消息も奉らぬを。(若菜上 P 105)

右の例は、決して心でミルという「……ニミル」の使い方だとは考えられない。やはり、視覚的な「……ヲミル」の使い方である。つまり、自分の目で見るといふ動作を意味しているのであつて、心情を表現してゐるのではない。こ

のような例が、十八例はあるのである。

もちろん、伊藤氏も視覚的な「見る」が全くないと述べ  
ておられる訳ではなくて、

や・視覚的な「見る」があるとするならばという表現を  
しておられる。しかしながら、「：：：ヲミル」という例が  
十八例ある以上、「あるとするならば」という表現は適当  
でないように思う。

ところで、「：：：ヲミル」という場合は、当然、客語が  
あるはずである。この客語は、「給ふ」が聞手敬意であ  
ることから考えると、話し手と聞手の間に介在する三人称  
であろうと思われる。前述した用例をみると、(2)は「あり  
さま」、(3)は「仮名文」と示してあり、(1)も「幼ない人」  
(夕霧)の顔」と容易に想像できる。この三例は聞手以外  
の三人称となつている。又、十八例すべての客語をみても、  
聞手以外の人物の有様、ようすが十三例、あるべき事が三  
例、手紙二例、猫一例となつている。このようなことから  
客語をとる場合は、聞手以外の三人称を客語とすると考え  
てよい。しかも、客語に対する敬意はなく、あくまでも聞  
手に対する敬意である。

以上、「：：：ニミル」「：：：ヲミル」の例について考え  
てきたが、「：：：ニミル」という心情表現は二四例しか  
ない。しかし、「見る」の用例は他に三九例あるので、これ  
らが、どのような使われ方をしていのかみてみよう。

「見る」という動詞には、前述した意味の他にいろいろ  
な意味があるが、その中で、「世話をする」という意味に

七例使われている。

▽内大臣「頼もしき御蔭に、幼き者を奉りおきて、みづか  
らはなかなか幼くより見たまへもつかず……(源氏・少  
女・P 36)

右の例は、内大臣自身が娘の雲居雁の世話をする、という  
動作を卑下することによつて、聞手の大官に敬意を払つて  
いる場面である。このような「世話をする」の意が、心情  
表現でないことは、言うまでもない。

また、「知つている、顔見知り」に三例使われ、次のよ  
うな「逢う」の意に二例ある。

▽：：：なほ時々見たまへを、所のさがにや：(手習P 35)  
これは、薫が明石中宮に、自分が世話をしている女性に時  
々「逢つていた」と話しているところで、薫自身の動作に  
ついた例である。

▽尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。(若紫P 286)  
最後の一例は、右の例で、「夢をみる」という意味に使わ  
れている。「：：：ヲミル」の形ではあるが、視覚的なみ  
てはないし、もちろん心情表現でもないで別に示した。  
話し手源氏の夢をみるという動作についたと考える。

この他に、「見る」が複合語を作つて、その複合語独特  
の意に使われている例が、二四例ある。「給ふ」は複合語  
の間に、

▽「山踏みしはべりて、あはれなる人をなむ見たまへつけ  
たりし」(玉鬘P 113)

のような形ではいる性質があるが、このことについては第

二章で詳しく述べることにして右の例をみる。これは、右近があらはれる人(玉鬘)を見つけ出したと源氏に報告しているところで、右近の見つけるという動作を卑下して源氏に敬意を払った例である。このように「見る」が複合語を作った場合は、独特の意をあらわす。しかも、心情表現ではなく動作を意味しているようである。

以上、伊藤氏の上接語「見る」について考察してきた。

「：：ニミル」が二四例、「：：ヲミル」一八例、他の「見る」の意一五例、複合語の意二四例となっていた。つまり、心情表現が二四例で、他の五七例は話し手自身の動作につけられているということである。

このことから考えると、「見る」は心情を表現するとは言えないようだ。しかし、第一節で述べたように、「給ふ」の上接語は、大部分が「思ふ」であるから、「思ふ」の使われ方をみる必要がある。伊藤氏は、この「思ふ」については、

「誰々を思ふ」という使い方はない

と述べられているだけである。私の調べたところによると、

「思ふ」単独の場合は、

(1)口惜しう御供に後ればべりにけると思ひたまへられしか

ば(松風P 408)

(2)荒き浪の声にまじるは、悲しくも思ひたまへられながら

(明石P 233)

のような、自分の意見・感想を述べるのに使われる一即ち心情表現がほとんどであった。そして、それは、(1)のよう

に、自分の意見の根拠を示し、引用の「と」を受けて使われる例と、(2)のように、形容詞を伴って心情を表わす例とに大別できる。しかし、客語をとって「：：ヲ思ふ」がない訳ではなく、たとえば

▽今は、この世のことを思ひたまへねば、験方の行ひも：  
(若紫P 274)

のような例がある。又、

▽藤壺「今はじめて思ひたまふる事にもあらぬを：：  
木P 124)

のように「思ふ」が「決心する」の意で使われた例もある。但し、このような例は極めて少ない。「思ふ」単独の場合

は、やはり、自分の判断・心情を述べた例が圧倒的に多い。さて、「思ふ」も「見る」と同様に、複合語を作つて、

間に「給ふ」が入る例がある。

▽夕霧「いかでか、昔を思ひたまへ出づる御かほりどもに  
は、身を棄つるさまにも、とこそ思ひたまへ知りはべる

を：：(藤裏葉P 430)

右のように、「思ひ出づ」とか「思ひ知る」と、複合語独特の意味に用いられる例がかなりある。これは、「思ふ」単独に比べると、何らかの行為を示すようである。

以上、上接語「思ふ」について、少々述べてみた。「思

ふ」単独の場合、心情を表わす例がほとんどだし、「見る」

にも二四例、心情表現があることから考えると、「給ふ」は自己の心情を表現する特殊な言葉につくのではない、と言いつけることはできない。けれども、「思ふ」にもかなり

複合語があるし、又「見る」の場合には特に、動作を表わす例が多いことを考えると、果たして、「給ふ」が心情表現に用いられたか、疑問になつてくる。私は、むしろ、「給ふ」は、「思ふ」「見る」「聞く」「知る」という自己の知覚の動作を表わす語につくと考えるべきであると結論したい。

## 第二章 活用形について

### 第一節 活用形の種類と頻度

謙讓の補助動詞「給ふ」は下二段活用であるから、本来ならば活用形は「へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ」すべてに活用するはずである。ところが、表Ⅲをみてもわかるように「給ふ」の場合は、終止形と命令形が四作品すべてに現われていない。つまり、下二段活用補助動詞「給ふは、この表でみる限り、「へ・へ・ふる・ふれ。」と活用している。これはどういふことなのだろうか。最も第一章で述べたように、「給ふ」が「思ふ」「見る」「聞く」「知る」という自己の動作を卑下して、相手に敬意を払う謙讓語ということから考えると、命令形がないのは当然のことであろう。自分自身の動作に命令形がつくとは考えられないからである。

しかし、終止形は、逆に用例があつて当然であるが、これは、四段活用形尊敬の補助動詞「給ふ」との混同を避けるためではなかつたかと考えられる。「給ふ」にみられる四活用の中では連用形が非常に使用頻度が高く、全体の

表 Ⅲ

	狭衣物語	夜の寝覚	源氏物語	落窪物語	作品名 / 活用形
143 (19.7%)	32 (32.6%)	10 (14.9%)	100 (19.1%)	1 (2.6%)	未然形
406 (55.8%)	47 (48.0%)	37 (55.2%)	300 (57.3%)	22 (56.4%)	連用形
141 (19.4%)	13 (13.3%)	14 (20.9%)	104 (19.9%)	10 (25.6%)	連体形
37 (5.1%)	6 (6.1%)	6 (9.0%)	19 (3.7%)	6 (15.4%)	已然形
727	98	67	523	39	計

五五・八割を占めている。続いて、未然形・連体形・稀に已然形となつている。

### 第二節 複合形態について

第一節で述べたように、「給ふ」の活用形は連用形が最も多いのであるが、この理由の一つとして、「給ふ」が複合語に介在しやすいということであげられる。それは、次のような例である。

▽さばかりにてありぬべくなん思ひたまへ出でらるる。

表 IV

	狭衣物語	夜の寢覚	源氏物語	落窪物語	
	17	14	146	3	「思う」「見る」の複合語の複合語
	2	4	24		「思う」「見る」の複合語の複合語
	19	18	170	3	複合語合計
	$\frac{19}{47}$	$\frac{18}{37}$	$\frac{170}{300}$	$\frac{3}{22}$	連用形に対する複合語
	(40.4%)	(48.6%)	(56.6%)	(13.6%)	する複合語
	$\frac{19}{98}$	$\frac{18}{67}$	$\frac{170}{523}$	$\frac{3}{39}$	する複合語
	(19.4%)	(26.9%)	(32.5%)	(7.7%)	全用例に対する複合語

▽ (源氏・帚木 P 152)  
 「いかならむ」と思おもうたまへへ嘆なげきつるに、うれしく…:  
 (落窪・卷二 P 204)  
 これからみてもわかるように、「給ふ」は「思おもい出いで給たまふ」ではなく、「思おもひたまへへ出いづ」のように、複合語に介在して使用されるのである。

さて、表IVをみると、複合語に「給ふ」が介在した例がかなり多いことがわかる。総数で二一〇例、これは「給ふ」の連用形例の五一・七%にあたる。又、「給ふ」全用例の二八・九%である。作品では「源氏物語」が圧倒的に多く一七〇例を占めている。「落窪物語」では三例と極端に少ないが、全用例の少ないことを考えると然程問題ではない。とにかく「給ふ」は複合語に介在して用いられ、その用例も多いということである。

### 第三章 敬意の程度について

#### 第一節 場面の考察

第一章で述べたように、「給ふ」は自分自身、又は自分の側の人間の「思ふ」「見る」「聞く」「知る」という動作を卑下することによって、聞き手に敬意を払う謙讓語であった。つまり、「給ふ」は話し手と聞き手の関係で使われた。

このことから考えると当然のことであるが「給ふ」が使用されるのは会話文がほとんどである。表Vをみると、「落窪物語」の五三・八%以外は三作品すべて九〇%前後が会話文である。そして、やはり書き手と読み手が存在する消息文に全体の一二・一%が使われ、会話文と消息文で九八・二%を占めることになる。つまり、「給ふ」は会話文と消息文に使われるといつても過言ではない。

尚、心中文、地の文と考えられる例もあるが、話し手、

表 V

	狭衣物語	夜の寢覚	源氏物語	落窪物語	
634 (87.2%)	87 (88.8%)	64 (95.5%)	462 (88.3%)	21 (53.8%)	会話文
88 (12.1%)	9 (9.2%)	3 (4.5%)	59 (11.3%)	17 (43.6%)	消息文
2 (0.3%)	1 (1.0%)			1 (2.6%)	心中文
3 (0.4%)	1 (1.0%)		2 (0.4%)		地の文
727	98	67	523	39	計

聞手のないことから、今後の検討が必要である。

## 第二節 敬意の主体と対象

「給ふ」は話し手と聞手の間で使われる謙讓語であったが、この話し手と聞手はどの程度の身分なのであろうか。「給ふ」はどれ位の敬意をもち、どのような言葉として用いられたのであろうか。このことについて、四作品の中で圧倒的に用例数の多い「源氏物語」を中心に考えてみることにする。

まず「源氏物語」全用例について、「給ふ」の敬意の払い方、使用度数を示した表VIをみてみよう。但し、この表は源氏を中心にまとめたものである。

表VIをみると、話し手（敬意の主体）となつてゐる人物は、上限は院・帝の位から、下限は命婦・乳母の位までとかなり幅広く用いられている。又、聞手（敬意の対象）も人物は少ないが、上限と下限は同様である。

さて、この二者の間の敬意の払い方であるが、高い身分の者から高い身分の者へ、たとえば、桐壺院↓朱雀院、又、低い身分の者から、その者の主人、主人の妻・夫・恋人へ、たとえば、惟光↓源氏、小侍従↓女三の宮などがある。

ところで、この中で最も使用度数の高い源氏を中心に考えてみるならば、まず、源氏に対して「給ふ」を以つて話をしてゐる人々は

朱雀帝・大宮・藤壺・左大臣・朝顔の君・女五の宮・螢宮・頭中将・左大臣の子息・北山僧都・紫上の祖母・秋好中宮・六条御息所・玉鬘・夕霧・末摘花・空蟬・明石の君・北山聖・明石入道・明石入道の北の方・左馬頭・式部丞・紀伊守・太宰帥・惟光・源氏の乳母・紫上の乳母・明石中宮の乳母・大輔命婦・夕霧の乳母・右近（浮舟付き）

源氏とお互いに「給ふ」を使つてゐる人々は

朱雀帝・大宮・藤壺・左大臣・朝顔の君・螢宮・頭中将・北山僧都・紫上の祖母・秋好中宮・六条御息所・玉鬘





